

高校生のセーリング競技への参加動機に関する研究 —セーリング経験年数とスポーツ経験による比較—

平野 貴也

要旨

本研究はセーリング競技への参加動機を明らかにすること、特に参加動機の個人差をヨット経験年数とスポーツ経験によって比較することを目的とした。全国高等学校総合体育大会ヨット競技に出場した高校生にアンケート調査を実施し、235名が対象者となった。因子分析の結果、セーリング競技者の参加動機は「技能」「健康・自然」「承認親和」「悔しさ」「爽快解放」の5因子が抽出され、累積寄与率は54.21%であった。対象者全体では、「健康・自然」の得点が最も高く、「爽快解放」が最も低かった。対象者の傾向として自然や海というフィールドの中で技能を競い合うことを重視していると言える。経験年数による比較では3年以上経験している者においては3年未満の者に比べ、「技能」「承認親和」の得点が有意に高く、もっとうまくなりたいという気持ち、期待にこたえたい、認められたいという動機が強いことが示された。スポーツ経験との関係では、高校入学前よりヨット競技を行ってきた者（専属群と並行群）は「技能」の得点が高く、もっとうまくなりたいという動機が強い。さらにヨットと他の種目を並行して行ってきた者（並行群）は他の者よりもすべての因子において得点が高い。特に「技能」「承認親和」「悔しさ」については有意に高く、多様な動機を持ちセーリング競技を行っていることがわかった。

A Study on the Motivations of High School Sailors to Participate in Competitions —Comparative Analysis of Sailing Experience and Sports Experience—

Takaya Hirano

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the motivations of high school sailors to participate in sailing competitions, particularly focusing on the motivations of individual sailors based on the length of their experience in sailing and in sports generally. Data was obtained from 235 sailors who participated in the Japanese National High School Yacht Regatta in 2010. The major results of the research are as follows: 1) Factor analysis of motivations to participate in sailing competitions revealed five factors, namely "skill", "health and nature", "recognition and affiliation", "mortification", and "refreshment". Among these five, the influence of "health and nature" ranked the

highest, and that of "refreshment" the lowest. 2) Concerning "skill" and "recognition and affiliation", the sailors with 3 or more years of experience showed a significantly higher score than those with less than 3 years. 3) The sailors were categorized into 4 groups according to their sporting experience. These were "non-participation", "sailing only", "transfer" (from another sport to sailing), and "sailing and other sports". The groups of "sailing only" and "sailing and other sports" showed a significantly higher score in "skill" than the other groups. The "sailing and other sports" group also showed a significantly higher score in, "recognition and affiliation" and "mortification" than did other groups.

I. はじめに

セーリング競技は、セール（帆）に流れる風によって生ずる揚力を動力として、水面を滑走する技術を競う競技種目である^(注1)。セーリングには一般的にヨットと呼ばれる小型のディンギーヨットの他に、キャビンを備えた大型のクルーザー、双胴艇など多様な艇が使用されており、年齢や性別に関係なく親しまれている。

スポーツ競技において高いパフォーマンスを発揮するためには長期間にわたる継続的なトレーニングが必要とされている。前田ら（1994）によれば、ヨット競技は競技開始年齢の遅い種目とされており、高校入学を機に他種目からヨットに転向する者が多いことが報告されている。ジュニアヨットクラブなども普及してきてはいるが、用具が高価なことやヨットハーバーなどの練習場所への移動手段の確保がままならないなど小中学生が気軽に開始できる種目にはなっておらず、ヨット部が設置されている高等学校においてセーリング競技と出会い、継続的に活動するケースが多くみられる。そのため高校生競技者の参加動機を知ることはセーリング競技の普及、セーリングの継続的な実施を考える上で重要な要素と言える。

これまでスポーツへの参加動機に関する研究にはスポーツ全体への参加動機（丹羽・松村、1979；山本、1991；松本ら、1999；松本ら、2001；藤本・菊池、2006）、ある特定のスポーツ種目への参加動機（Kolt, et al.,1999；McDonough & Crocker,2003；西田、2006）などが見られる。川西ら（1993）は複数種目の一流競技者を対象にキャリアパターンとスポーツ環境に関する調査を行い、セーリング競技では親や先輩などの重要な他者の影響とヨットハーバーやヨット部など環境的な要素を参加する要因として挙げている。また久保ら（1997）の研究においては、ジュニアヨットクラブ所属者の場合、家族環境、環境整備の重要性をあげている。また筆者ら（2007）はウインドサーフィンにおける大学生競技者を対象に参加動機と競技成績の関連性を検討している。しかし、高校生がヨット競技へ参加する動機については充分に明らかにされていない。

そこで本研究ではセーリング競技への参加動機を明らかにすること、特に参加動機の個人差をセーリング経験年数とスポーツ経験によって比較することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者

本研究ではセーリング競技の全国大会に出場した高校生342名（補欠選手を含む）に調査用

紙を配布した。回収数（率）は282部（82.5%）で、有効な回答（率）が得られた235部（83.3%）を分析の対象とした。

2. 調査時期及び場所

調査は2010年度全国高等学校総合体育大会ヨット競技会場（沖縄県島尻郡与那原町）において2010年8月3日から8月10日の期間に調査を実施した。

3. 調査内容

1) 基本的属性

年齢、性別、居住地、セーリングの開始時期、セーリングの経験年数、これまでのスポーツ活動、練習時間、練習頻度、個人的支出、セーリングを始めたきっかけ

2) セーリングへの参加動機

まずセーリングへの参加動機を調査する項目を作成するに当たり、予備調査としてセーリング競技を行っている38名の高校生に対してセーリング競技に参加する理由について自由記述を求め、83項目の回答を得た。次にこれまでのスポーツ参加動機、セーリングに関する先行研究（丹羽・松村、1979；松本ら、1999；松本ら、2001；藤本・菊池、2006；西田、2006；平野、2007）から向上、健康、悔しさ、他者期待、達成、有能感、親和、種目特性、楽しさ、自然、固執、解放の12要因を選んだ。前述の自由記述項目の中から12要因の内容を反映すると思われる質問項目を2項目ずつ選択し、計24項目からなる質問紙を作成した。本研究では「ヨット競技に参加するのは、どのような理由からですか？」と質問することによってセーリングへの参加動機をとらえることとした。各項目に「かなりあてはまる」に5点、「ややあてはまる」に4点、「どちらでもない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「まったくあてはまらない」に1点の得点を与え、数値化した。

4. 調査方法と分析

各チームの監督に調査の主旨を説明し、調査の許可を得た後に、監督を介して調査用紙と回収用封筒をチームごとに配布した。回答後、チームごとに回収用封筒に入れ、封をして本部テントの回収箱に入れてもらった。統計処理は日本語版 SPSS 16.0 for Windows を使用した。

III 結果及び考察

1. 対象者の特性

対象者の平均年齢は16.63歳、性別は男性が58.72%、女性が41.28%であった。セーリングの経験年数は1年から14年に分布しており、平均3.45年であった（表1参照）。全体の69.79%が3年未満の経験ではあるが、インターハイに出場するには各県の予選を勝ち抜く必要があり、競技レベルにおいては全員が高校トップレベルの競技者である。

高校入学以前の継続的なスポーツ活動をスポーツ経験とし、小学校、中学校時に継続的に実施していたスポーツを記載してもらった。それらをセーリングのみを行っていたセーリング専属群、他のスポーツ種目を行っており、トランスファーした転向群、セーリングと並行して他の種目を行っていた並行群、継続的なスポーツ活動を行っていなかった無所属群の4

表1 対象者の属性

項目	n=235	(%)	項目	n=235	(%)
1. 性別			4. きっかけ		
男性	138	(58.72)	友人・知人・先生の勧誘紹介	81	(34.47)
女性	97	(41.28)	家族の勧誘紹介	42	(17.87)
2. セーリング経験年数			海に興味があった	31	(13.19)
3年未満	164	(69.79)	部や団体の雰囲気	23	(9.79)
3年から6年未満	46	(19.57)	格好良く思えた	17	(7.23)
6年以上	25	(10.64)	気持よさそうだった	12	(5.11)
3. 高校入学以前のスポーツ活動			スポーツをしたかった	12	(5.11)
転向群	135	(57.45)	健康を考えて	4	(1.7)
並行群	43	(18.29)	自然が好きだった	4	(1.7)
専属群	32	(13.62)	その他	9	(3.83)
無所属群	25	(10.64)			

表2 活動の状況

項目	n=235	(%)
1. 練習頻度(週)		
週1日から3日	48	(20.43)
週4から5日	23	(9.79)
週6日から7日	164	(69.79)
2. 練習時間(1日)		
1から3時間	73	(31.06)
4から6時間	117	(49.79)
7時間以上	45	(19.15)
3. 経費(月)		
月1万円未満	178	(75.75)
月3万円未満	26	(11.06)
それ以上	31	(13.19)

群に分類した。転向群が62.25%と最も多く、前田ら(1994)の先行研究と同様の結果であった。並行群(14.04%)については、中学校等ではヨット部がないため、課外活動として他のスポーツを行い、週末に地域のセーリングクラブ等でセーリングを行っていたことが推測される。セーリングを開始したきっかけとしては友人・知人・先生の勧誘紹介と家族の勧誘紹介をあわせると52.34%になる。先行研究でも示されているようにセーリング愛好者を増やすには積極的な声掛けが有効であると言える。

表2より、セーリング活動状況として練習時間は4から6時間、練習頻度は週に6から7日が最も多かった。約7割の高校がほぼ毎日練習を実施できる環境にあり、平日は4時間以上練習している。さらに週末には7時間以上練習しており、特に学校から練習地の距離が遠い学校は週末に多くの練習時間を確保していると考えられる。セーリングを行うことによって個人が負担する費用(遠征費、備品などを含む)を月額で平均し、記入させた。全体で8割弱の者は1万円以下の負担であり、3万円未満11.06%、3万円以上の負担者は13.19%であった。インターハイに出場する選手は国内トップレベルの選手であり、用具や遠征などに費用がかかるため個人的な費用の負担がもっと多いと予測されたが、実際はそれほど個人的な負担は多くない。「セーリング競技はお金がかかる」というイメージは高校生の活動におい

群に分類した。転向群が62.25%と最も多く、前田ら(1994)の先行研究と同様の結果であった。並行群(14.04%)については、中学校等ではヨット部がないため、課外活動として他のスポーツを行い、週末に地域のセーリングクラブ等でセーリングを行っていたことが推測される。セーリングを開始したきっかけとしては友人・知人・先生の勧誘紹介と家族の勧誘紹介をあわせると52.34%になる。先行研究でも示されているようにセーリング愛好者を増やすには積極的な声掛けが有効であると言える。

てあてはまらない結果となったが、それはあくまで学校や地域からの補助が得られていることに起因しているものと推測される。

2. セーリング競技への参加動機

1) 因子分析による尺度構成

因子分析を適用するにあたり、まず平均と標準偏差から選択肢の両端に全体の70%以上を占める項目4項目を分析から除外した。次に主因子法 promax 回転による探索的因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上の因子は5因子であった。そのうち、いずれの因子の負荷量においても.40以下であった2項目を除き、最終的に表3に示した5因子18項目が抽出された。5因子の累積寄与率は54.21%であり、この5因子でもってセーリングへの参加動機の約5割を説明している。なお本研究では、因子分析の方法として斜交回転を用いたので、表3に因子間の相関係数をあわせて記した。因子間の相関は.56～.26間での値を示し、すべての因子間に1%水準の正の相関が見られた。それはセーリング競技への参加動機が相互に関係していることの反映であると考えられる。

表3 セーリングの参加動機の項目内容と因子構造

項 目	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
<技能>					
自分に向いている種目だと思っから	0.873	-0.067	0.124	-0.119	-0.111
今後もっとうまくなると思っから	0.594	0.125	0.121	-0.091	-0.033
他のスポーツよりもうまうまできるから	0.593	0.031	0.019	0.102	0.027
他の人よりもうまうまできるから	0.559	-0.141	-0.150	0.135	0.213
ヨットや競技に強い愛着があるから	0.545	0.139	-0.033	-0.075	0.106
<健康・自然>					
健康と体力が得られるから	-0.088	0.775	0.108	-0.036	-0.060
運動すると気持ちいいから	-0.161	0.638	0.088	-0.028	0.212
海や自然が好きだから	0.240	0.584	-0.158	0.103	-0.126
海や自然との一体感が得られるから	0.284	0.517	-0.073	0.102	0.088
<承認親和>					
仲間や友人の期待にこたえたいから	0.051	-0.025	0.931	-0.029	-0.017
うまくなって他の人に認めてほしいから	0.206	-0.173	0.525	0.274	0.045
家族や指導者の期待にこたえたいから	0.032	0.140	0.490	0.067	-0.058
ヨットを通じて友達ができるから	-0.140	0.218	0.406	0.038	0.215
<悔しさ>					
なかなかうまくならず悔しいから	0.043	0.092	0.081	0.846	-0.114
他の人よりもうまうまできなくて悔しいから	-0.112	-0.015	0.021	0.814	0.136
<爽快解放>					
気分転換やストレス解消になるから	0.146	0.013	0.095	-0.253	0.743
他のことを忘れられるから	0.068	-0.076	-0.098	0.231	0.550
非日常を感じられるから	-0.063	0.069	-0.032	0.145	0.537
	F1	F2	F3	F4	F5
因子相関行列	F1	0.296	0.508	0.433	0.411
	F2		0.422	0.261	0.558
	F3			0.377	0.477
	F4				0.356

第一因子では仮定した動機のうち向上、有能感に高い因子負荷量が示された。これらの項目はセーリング技能の向上やセーリング技能が他の者より優れていることを表しているため「技能」因子と命名した。第2因子は健康、運動、自然の項目で構成されており、「健康・自然」因子と名付けた。第3因子は他の人の期待にこたえることで承認される事や友人との良好な関係を望むことから「承認親和」因子と命名した。第4因子は悔しさに関する2項目で構成されることから「悔しさ」の因子と命名した。第5因子はセーリングをすることで解放感が得られる、他のことを忘れられるなどから「爽快解放」因子と命名した。各因子の内的整合性を検討するためにCronbachの係数を算出したところ、第一因子から順に、.74、.76、.72、.85、.65の値を示した。信頼性係数に関しては.70程度が望ましいとされている。「爽快解放」尺度に関しては内的整合性が充分であるとは言えないが、それが使用可能な水準にあること、内容的にも許容範囲であると判断されることから、尺度として採用することとした。その他の因子については十分な値を示しており、一定程度の信頼性を有していると考えられ、これら5因子をセーリングの参加動機を測定する下位尺度として位置付けた。またこれらの因子構造は項目作成時に用いた先行研究の結果を反映しており、下位尺度の構成概念の妥当性は一定程度満たされているものと推察された。

2) 参加動機に関わる得点の比較

まずセーリング競技における特徴を把握するため、対象者全体の平均値、標準偏差を算出した(表4)。その結果、得点の比較において「健康・自然」の得点が最も高く、「爽快解放」が最も低かった。自然に関する項目の得点が高いのは海の上で競技を行うセーリングスポーツの特徴であると言える。対象者の傾向として身体活動が健康に結びつくことを理解したうえで、自然や海の魅力を求めてセーリングに取り組んでいると考えられる。また「技能」や「悔しさ」においても高い値を示されており、自然や海というフィールドの中で技能を競いあうことを重視していることの反映であると判断される。高等学校の課外活動は競技ばかりでなく様々な要素を含んでおり、セーリングの大きな魅力の一つと考えられる爽快に艇を走らせることや気分転換は参加動機としてそれほど強くないことがわかった。

表4 セーリング参加動機得点

	平均値	SD
技能	3.56	0.74
健康・自然	3.81	0.79
承認親和	3.47	0.85
悔しさ	3.52	1.06
爽快解放	3.22	0.92

表5 セーリング経験年数別に見たセーリング参加動機得点の比較

	3年未満群 (n=164)		3年から6年未満群 (n=64)		6年以上群 (n=25)		F 値		多重比較
	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D			
技能	3.43	0.70	3.92	0.64	3.75	0.90	9.35	***	<
健康・自然	3.78	0.78	3.90	0.82	3.87	0.84	0.52		
承認親和	3.38	0.84	3.64	0.76	3.72	0.99	3.04	*	<
悔しさ	3.45	1.04	3.92	0.95	3.28	1.23	4.53	**	<
爽快解放	3.18	0.91	3.26	0.92	3.43	1.00	0.85		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表5はセーリング経験年数を独立変数、各々の下位尺度得点を従属変数として一元配置の分散分析を行った結果である。それによると「技能」「承認親和」「悔しさ」因子に有意な差が見られた。多重比較 (Tukey 法) の結果から経験年数によるセーリング参加動機得点を比較検討した。3年以上継続している2群は「悔しさ」以外の得点において3年未満の群より得点が高く、「技能」「承認親和」に関しては有意な差が見られた。さらに3から6年未満の群は「承認親和」因子以外の因子において他の群よりも高い得点を得ており、「悔しさ」に関しては有意に得点が高かった。これらのことから3年以上継続している者は、もっとうまくなりたいという気持ち、周囲の期待にこたえたい、認められたいという強い動機に加え、多様な参加動機を持っており、多目的にセーリング競技を行っていることがわかった。

表6 スポーツ経験別にみたセーリング参加動機得点の比較

	専属群 (n=32)		転向群 (n=135)		並行群 (n=43)		無所属群 (n=25)		F 値	多重 比較
	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D		
技能	3.86	0.82	3.46	0.71	3.89	0.76	3.38	0.55	5.33	*** <
健康・自然	3.68	0.91	3.79	0.79	4.11	0.74	3.69	0.67	2.07	
承認親和	3.42	0.81	3.37	0.84	4.02	0.75	3.38	0.82	5.72	*** <
悔しさ	3.40	1.18	3.44	1.08	3.95	1.00	3.58	0.74	2.48	* <
爽快解放	3.16	0.93	3.18	0.93	3.51	0.98	3.16	0.73	1.24	

*p<.05 ***p<.001

表6は、高校入学前のスポーツ活動をグループ化して独立変数とし、各々の下位尺度の得点を従属変数として一元配置の分散分析を行った結果である。それによると「技能」「承認親和」「悔しさ」因子に有意な差が見てとれる。多重比較 (Tukey 法) の結果を踏まえ、高校入学前のスポーツ活動状況の違いによるセーリング参加動機得点を比較検討してみた。高校入学前からセーリング競技を行ってきた専属群と並行群は他の群と比較して「技能」の得点が高い。それは継続年数にも関連があるものと考えられ、長期間競技に携わってきた者はもっとうまくなりたいたいという動機が強いと推測される。なおセーリングと他の種目を並行して行ってきた並行群は他の者よりもすべての因子において得点が高い。特に「技能」「承認親和」「悔しさ」については有意な差が見られた。一方、セーリングだけを継続してきた群は「技術向上」以外の得点がそれほど高くない。入学前は他の競技と両立して行っていたが、高校では他の競技を継続することをあきらめ、セーリング競技を中心に活動していると考えられる。それは他のスポーツにも求めていたものをセーリング競技のみに求めることとなり、結果としてセーリングに対する参加動機を強めることになったと判断される。

なお今回の調査では、ジュニアヨットクラブなどでセーリングを経験した者が、セーリング活動から離脱して高校入学後に再びセーリング活動を開始するケースは見られなかった。このことから、完全にセーリング競技から一定期間離れてしまうと復帰しづらい種目であるとも考えられる。そのためセーリング競技からの離脱を防ぐには、中学校等の課外活動で他のスポーツを始めるにしても並行してセーリング活動を実施できる環境を作ることが大切であると認識される。さらに他のスポーツと並行して定期的にセーリングを実施することで、本格的にセー

リング競技を開始した際に参加動機の高いセーラーの育成にもつながるのではないかと推測された。

IV. まとめ

本研究はセーリング競技への参加動機を明らかにすること、特に参加動機の個人差をセーリング経験年数とスポーツ経験によって比較することを目的とした。比較研究を行うにあたっては全国高等学校総合体育大会セーリング競技に参加した高校生235名を対象とした。収集されたデータに因子分析、一元配置の分散分析を適用し、以下の結果が得られた。

1. 因子分析の結果、セーリング競技者の参加動機は「技能」「健康・自然」「承認親和」「悔しさ」「爽快解放」の5因子が抽出され、累積寄与率は54.21%であった。
2. 対象者全体としては、「健康・自然」の得点が最も高く、「爽快解放」が最も低かった。対象者の傾向として自然や海というフィールドの中で技能を競い合うことを重視していると言える。
3. 経験年数による比較において3年以上経験している者の「技能」「承認親和」に関する得点が3年未満の者に比べて、有意に高く、もっとうまくなりたい、期待にこたえたい、認められたいという動機に関係しているものと考えられる。
4. スポーツ経験との関係では高校入学前からセーリング競技を行ってきた専属群と並行群は他の群との比較において「技能」の得点が高く、もっとうまくなりたいという動機との関わりを示していると判断される。またセーリングと他の種目を並行して行ってきた並行群は他の者よりもすべての因子において得点が高く、とりわけ「技能」「承認親和」「悔しさ」においては得点が高いと高く、それは多様な動機を持ちセーリング競技を行っていることの反映であると解釈される。

注

- 1) セーリングとヨットは同義とされてきたが国際競技団体が「セーリング」の呼称を採用したことを契機に、セーリングという呼称が定着しつつある。調査対象とした全国高等学校総合体育大会においては「ヨット」の名称を採用しており、課外活動の名称や高校生は「ヨット」を使用することが多い。ただオリンピックおよび国民体育大会では「セーリング」種目とされており、ここでは「セーリング」の名称で記載することとする。

参考文献

平野貴也、柳敏晴「学生ウインドサーファーの参加動機および活動継続要因が競技成績に及ぼす影響」『名桜大学総合研究』(10), pp.13-22, 2007.

川西正志『一流スポーツ選手のキャリアパターンとスポーツ環境に関する社会学的研究』鹿屋体育大学 平成5年度教育研究学内特別経費報告書 . pp.73-84 . 1993.

Kolt, G.S., Kirkby, R. J., Bar-Eli, M., Blumenstein, B., Chadha, N., Liu, J. and Kerr, G. *A cross-cultural investigation of reasons for participation in gymnastics*. International Journal of Sport Psychology, 30 (3) :pp.381-398.1999 .

蔵本健太、菊池秀夫「大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究：体育会運動部とスポーツサークル活動

高校生のセーリング競技への参加動機に関する研究

- 参加者の比較」『中京大学体育学論叢』47(1), pp.37-48, 2006 .
- 前田 博子,川西 正志,松下 雅雄,柳 敏晴「漕艇・ヨット選手のスポーツキャリアに関する研究 : 競技開始年齢の遅い種目の複数種目経験について」『日本体育学会大会号』(45), p.176. 1994.
- 松本秀夫、渋谷聡、田中靖久「学生のスポーツ参加に関する研究--海洋学部生におけるスポーツ経験と参加動機を中心として」、『東海大学紀要 海洋学部一般教養』(25), pp.45-56, 1999 .
- 松本秀夫、坪井宏、石川朝子、田中靖久、渋谷聡、村山勝、中見隆男「女子短期大学生のスポーツ参加に関する研究--短期大学部生(静岡)のスポーツ経験と参加動機を中心として」『東海大学紀要海洋学部一般教養』27,pp.49-58, 2001 .
- McDonough, M. H. and Crocker, P.R.E. *Comparing two models of sport participation motivation among young adolescent female sport participants*. Journal of Sport & Exercise Psychology June 2003: Vol. 25 Issue Suppl. S 98 Jun.2003.
- 西田 保「ゴルフにおける参加動機の特徴および類型化に関する研究」『総合保健体育科学』29(1),pp.5-13, 2006 .
- 丹羽劭昭、村松洋子「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」『体育学研究』、第24巻第1号 , pp.25-38.1979.
- 筒井清次郎、杉原隆、加賀秀夫、石井源信、深見和男、杉山哲司「スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因 : Self-efficacy Model を中心に」『体育学研究』40(6), pp.359-370 . 1996 .
- 山本教人「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」『体育学研究』第35巻 , pp.109-119.1990 .
- 山本教人「正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式」『健康科学』13,pp. 49-58, 1991 .